

岐阜県のカワバタモロコ生息池へのブルーギル侵入による絶滅の危機

石崎大介（三重大学大学院生物資源学研究科（リサーチフェロー））

岐阜県のカワバタモロコ生息池においてブルーギルの侵入が確認された。カワバタモロコは環境省のレッドリストで絶滅危惧 IB 類、岐阜県のレッドリストでは絶滅危惧 I 類とされる希少な小型のコイ科魚類である。平野部の小川やため池に生息していたが、生息環境の破壊や外来魚の侵入により絶滅の危機に瀕している。ブルーギルの侵入が確認された池は平地の水田の中にある素掘りの池で、梅雨の時期には周囲の水田が冠水し池とつながることで魚類が水田へ侵入し産卵できるなど、希少な水田生態系が残されている。直線距離で約 800 m の間に位置する 5 つの池が水路で接続されている。2000 年～2006 年にはそのうちの 4 つにカワバタモロコの生息が確認でき、オオクチバスやブルーギルなどの外来魚は確認されなかった（タイリクバラタナゴは確認された）。しかしながら、2012 年 11 月にそのうちのカワバタモロコが生息していない池にブルーギルの侵入が確認された。そして 2015 年 7 月 18 日にはカワバタモロコの生息していた池にもブルーギルが確認された。そこで、この池を対象に釣りおよびタモ網により 9 月 27 日から 11 月 23 日までに 5 回の採捕調査を行った。釣りによるブルーギルの CPUE は最大で 1 時間あたり 33 個体と、かなりの量が生息していると推察された。しかしながら、釣りやタモ網によりカワバタモロコも採捕され、タモロコ、ミナミメダカ、モツゴ、フナ属などの在来魚も生息していた。カワバタモロコが減少途中にあるのか、ブルーギルと共存しているのかは不明であるが、池に侵入したブルーギルは数年で在来魚を絶滅させるという研究結果もある。そのため、早急に他の池を含むブルーギルおよびカワバタモロコをはじめとする在来魚の生息調査を行うとともに、積極的な保全の必要があると考えられる。